

一 般 演 題 抄 錄

31. 自己免疫性肝炎の合併を考える原発性胆汁性肝硬変症の1例

小牧克守 田中陽一 岩井博司 大野恭裕 青木矩彦
近畿大学医学部第2内科学教室

61歳女性 微熱を主訴に来院。頸部に弾性硬のび慢性甲状腺を触知。マイクロゾームテスト10240倍、サイロイドテスト10240倍、GOT 83 IU/l, GPT 49 IU/l, ALP 1175 IU/l, γ -GTP 358 IU/l, IgM 269 mg/ml, IgG 3060 mg/ml, AMA 160倍, AMA-M2 26.7 U/l, 抗核抗体2560倍, 血沈74 mm/h, HLA タイピング A11, A2, B60(40), B51, CW3, DR4, DR12(5), また肝生検にて Giosson 氏鞘にリンパ球

浸潤, 偽胆管などがあり, 小葉管内でのリンパ球浸潤, 血管内皮の増生, 結合織増生, piecemeal necrosis が見られ, 自己免疫性肝炎及び原発性胆汁性肝硬変症と一致するものと考えた。以上より, 自己免疫性肝炎と原発性胆汁性肝硬変症の合併例と診断。UDCA 300 mg/day にて治療を行っており, 現在肝機能は安定している。今後, ステロイド治療の適応も含めて慎重に経過観察をおこなう必要がある。

32. 当科における気管支喘息患者の動向と喘息治療薬の変遷について

辻 文生 東田有智 川合右展 澤口博千代 岩永賢司
村木正人 原口龍太 久保裕一 福岡正博
近畿大学医学部第4内科学教室

目 的

わが国の喘息患者は小児の5~6%, 成人の3%といわれ全国で約400万人になる。当科における気管支喘息患者数は年々増えつづけているが, 喘息発作にて夜間救急外来を受診する患者数はむしろ減少している。当科の喘息患者動向では1980年から1999年までの新規登録患者数は年々増加している。また喘息の治療においても気管支喘息が好酸球等の炎症細胞による慢性炎症という概念に定着し, 1998年の喘息予防管理ガイドラインで示すように吸入ステロイドが喘息の中心となる治療となってきた。そこで1980年から1999年までの喘息患者数, 夜間救急外来受診者数ならびに1990年以降の喘息治療の推移について検討した。

結 果

当科における喘息患者動向では1980年より1999年までの間に新規登録患者数は年々増加し, 今では年間477名となり, 1999年の総登録患者数は2456名に達

した。しかし, 最近の患者数の増加と相反して, 喘息発作にて夜間救急外来を受診する患者数は減少しており夜間救急外来受診者数は1987年が最多で1015名であったがその後は徐々に減少し151名になっている。治療薬に関して1990年から1999年の間の検討では次のとおりである。①キサンチン製剤の使用量はあまり変化がなく, 患者1人あたりの使用量は相対的に減少している。② β 吸入薬の定時吸入があまり行われなくなったこと, また喘息治療の主流が吸入ステロイドに変わってきたことによって β 吸入の回数が減少している。③吸入ステロイド薬の使用量は年々増加傾向にある。以前に比べて今では, 軽症から重症まで幅広い範囲で用いられ, 喘息の治療が吸入ステロイドを中心とした治療に変遷してきたことが明らかである。

ま と め

吸入ステロイドの使用が喘息のよりよい管理に大きな役割を担っていることが示唆された。